

Hakuai Story

博愛物語

かたち
夢が結実に (IX)



季節は、1年前、堅牢な夢殻^{から}を破る発祥^{きっかけ}を、K病院O氏から贈られた夏隣りの頃だった。

透き通った若葉からの木漏れ陽^びは、あの日と同じ耀^{かがや}きで、
さん
燦々と降り注いでいた。病院と事務所の間には、厨房や寮として使用されていた古い木造2階の建物とそれなりの広さの中庭が在った。事務所とは、あの日、「博愛」の由来に耳を傾けた院長宅を改装した^{もの}建物だった。

中庭では、改装の建物から出る廃材^たを焚いては、よく炭火焼きをしたものだ。この習慣は、開院後も引き継がれ、親睦を深めると言っては、誰とはなしに焚き火の宴に着火した。

跳ね炭のパチパチと燃え上がる^{ほほ}燦火^{とき}は、あの火葬^{もの}の火焰とはまるで違って、希望が揺らいでいるかのように穏やかだった。

火脚が早まると煽られた焼き屑は、陽炎となって皐月の空高く舞い昇るのだった。

ゴールデンウイーク

連々休日の賑わいを横目で眺めながら、いよいよ完成

の佳境へと入った。心配した遅れがちな工程も何とか目鼻がついた。工事を請け負って戴いたS建設の方々とは、再三、焚き火を囲み盃を上げての交歓会だった。逐日、医療施設として造形になってゆく姿が、はっきりと確認できるようになっていた。

いよいよ他者依存の準備から自力の準備だけが残し、その終盤は、医師や看護婦さんの力を借りないと進捗しない準備ばかりだった。この頃、弟は、苦節6年の医学生を経て、大学病院から市内の国立病院の勤務医に就いていた。昼間の診療で憔悴し切っているにも拘らず、薬の整理やあれこれを深夜遅くまで手伝ってくれた。手際よく進んでゆく準備を眺めながら頼もしい限りだった。心の相棒だった。両親の愛情や仕送りも僅少な学生時代の^{たんしひょういん}簞食瓢飲が報われて、遂には医師となり、心ある医師ゆえに、また新たな悩みを抱きながらの憂患の頃だったと記憶している。

何故か、^{いま}現在でも、あの時の懸命に手伝ってくれていた姿が目に焼き付いて離れない。才気煥発な医師としての存在を、初めて認知したのは、この時だった。

U医院から移籍して戴いた訪問看護の^{ヒロイン}主役だったIさんと若き日の^{ジャズマン}演奏家S氏には、人手のない中で重い負担をかけたのだった。Iさんには、看護婦さんの準備の処を独りで受け持って戴いた。

看護婦・栄養士・検査技師など一緒に勤めていたK健診施設の同僚たちが、勤務を休んで、約束どおり手伝いに来てくれた。あの日、青臭い夢の話しを、黙って聴いてくれていた同僚達だった。今でも久しぶりに会うと博愛会の成長を、我がことのように喜んでくれている。

そんな交流会での事だった。夢を語り、あの多くの出会いを育んだK健診施設が、今は跡形もなく取り壊されたと聞いた。

市の区画整理事業に起因した結果^{もの}だった。心に沁みて、深い隔世の感に襲われた。

開院の前日は、受け付けからの流れなど入念な予行練習だけを実施して、親族だけでの大掃除で完了の時を迎えた。祝いの小宴^{かさ}すらない総ての質素は、嵩む出費を考慮してのものだった。

狭い待合の空間だったが、生花を飾り、BGMを調整して、明日の出航を待つだけとなった。流れるBGMは、往時の診療所では画期的な設備^{もの}だった。天井の一角から流れる楽曲に希望の音符が跳ねていた。

初めて所有して改装の終わった鉄筋の建物は、現在の病院と比較すると25分の1程度の小さな床面積^{いか}だったが、如何にも雄偉な姿で不壊^{ふえ}を感じさせるように建っていた。



何よりも明日の夢が、ぎっしりと詰まっていた。日本の医療を変えなければ……。そんな高邁な議論を真顔でしながら、夢を^{さかな}肴に、夜ともなれば乾杯色に染まるのだった。だが、医療とは、善くも悪しきも人々に大きな感動を与え、その分、身を切り刻むような責務を強いられるものだという認識は、全く以って薄いものだった。

館内の巡回と確認を幾度も繰り返し、家路に着いたのは、夜中の2時を廻っていた。建物の屋上には、「博愛」と書かれた異様に大きな電照の広告塔が載^のっていた。足元から照明の当たる不釣合いな看板は、それまでのI病院の4文字の名称を塗り替えただけのものだった。灯りをつけた博愛の2文字は、闇に浮き出て随分と大きく見えるのだった。これから始まる経営という壮絶な物語の予感すら出来ずに、「博愛」の2文字に長いこと^{みと}見惚れていた。

背景に広がる夜空には、開院日の晴天を約束するかのよう
に満天の星々が輝いている。

愁傷の永訣^{わかれ}から 13 年、
弾けた夢が、光年の彼方^{かなた}から



降って来たように^{きらめ} 煌く星々に埋もれて、「博愛内科クリニック」
は建っているのだった。

著者 那須 良昭

発行所 医療法人財団 博愛会

〒810-0034

福岡市中央区笹丘 1-28-25

tel:092-741-2626 fax:092-741-2627

本書に記載されております文書につきましては、転載・無断使用を禁じます

